

[集めよ！ジュニア会員！！]

# ⑤ジュニア会員と学会の インタフェースとしての会誌 —裾野を広げることの重要性—

基  
般

稲見昌彦 | 東京大学 構成：中田眞城子 | mplusplus (株)

## なぜジュニア会員なのか

会誌の第一の目的はといえば、当然ながら会員同士の情報共有である。しかし、同じく学会の発行する論文誌とは大きく異なる。論文誌は論文を掲載することが第一の目的であり、またその誌面を通じて専門家同士が分かりあえればその役目を果たす。だが、会誌の目的とする情報共有というのは、あらゆるコミュニティを繋ぐという意味合いを持つ。専門家と非専門家、基礎と応用、産業と学術、情報学と異分野、そして、世代を超えてのコミュニケーションもその1つだ。

だが、それを果たすためには、前提として会誌があらゆる世代に行き届いていなければいけない。しかし、日本全体が「超高齢化社会」化しているように、学会も同様の問題に直面している。恐らく現状として、大学の研究室に所属するまで会誌を目にすることのない学生がほとんどであろう。いや研究室所属学生であってもその存在を知らない学生もいるかもしれない。この状況に対して、早々に手を打たなければ、日本全体の問題と同様に情報処理分野に関するコミュニティも逆ピラミッドの末に傾いてしまうことは明らかである。この問題解決の1つの方法として、若い世代へのアプローチが行われている。

## 身近にある大切さ

私の学部時代の話をしよう。私は、当時ロボットサークルに入っていたのだが、部室の本棚には日本ロボット学会誌のバックナンバーが揃っていた。記事は最先端の研究に溢れ、それを身近に触れることができる誌面は魅力的だった。特にロボット動画がふんだんに入った「ビデオ特集号」はまさにロボット研究の世界への窓であった。私は会誌が身近にあったことで、自ら学生会員になろうと思うことができた。

現在の学会制度の変革によって、ジュニア会員は会費が免除され、無料で会誌を読むことが可能になった。大学のサークルに入るまでもなく会誌に出会ってもらえる可能性ができたといえる。とはいえ、みなさんが思い浮かべるのは恐らく高専生や学部生なのだろう。しかし、実際に最少年齢のジュニア会員は小学3年生であり、ほかにも全国に広く小学生会員が存在する。これは、編集長になって最初に驚いたことかもしれない。ジュニア会員本人ではなく親が会誌を読んでいるのではないかと訝ったのだが、調べてみると毎号理解できるところを探して読んでいる姿が想像できた。同様に中学生の登録者も存在する。許可を得て親の職業を聞いてみると情報とは別の分野のケースも少なくない。これは学会を飛び

越え、日本全体の底上げに役立つ非常に有意義な試みではないかと強く思う。

学部生だった自分にとって難しいことを分かりやすく解説してくれた記事はありがたかったが、難しいことはやはり難しく、当時に自分の知識では歯が立たないことがあるということを知ることも非常に良い経験であった。

編集長になり、会誌の編集方針を決めるときはその当時の自身の体験に拠っているところもある。

最先端の研究に触れることができるお得な制度を多くの若い人に知らせるとともにぜひ活用してもらいたい。

## 裾野を広げる

裾野を広げるということは、なだらかな丘をつくることでない。山で例えるなら富士山であるべきだ。裾野は広くなだらかなのであるにもかかわらず、道中は険しくその頂は高い。そして、見た目は美しく、遠くからも眺められることが大切だ。

菊乃井のオーナーシェフ、全日本・食学会理事長の村田吉弘さんは「伝統というのは古いものを守ることとは違う。新しいことに挑戦して、あとで振り返ったらそれが伝統になっている」とおっしゃっていた。これは学会でも同様である。

事実、新しいことに挑戦したいと若者が集まり続ける分野が成長し継続する。

情報学自体、これまでの60年は拡大が続いてきた分野である。今後は富士山のように裾野を広く、学会自体が新しいことを取り込み、変化し続けることが重要だと思っている。

さて、話は戻るが、理想の「超高齢化社会」とはどういったものかと考えたとき、高齢者が安心して暮らせる社会というだけでは問題は解決しない。そのような状況においても若者が未来に希望を持つことができ、活躍し、その上で高齢者とともに社会に参画して生きることができるのが「超高齢化社会」の正しい姿である。

会誌も未来を見据えた上で、単に読者層を増やすということではなく、年齢を問わない、そして他の分野の方とも交流できる場となるように、編集委員が触媒となっていていろいろな話題を投げ込んでいこうと思う。

読むことは考えることである。ふとしたきっかけで、いままで未知だったことを深く考え、未来に挑戦する気持ちを奮い立たせ、新たな活動に繋げる。そうあってほしい。私は人間拡張工学とエンタテインメントコンピューティングを研究しているが、その経験を活かし、会誌を通してジュニア会員をエンパワーし楽しませたい。そして、それは若者に限らず、高齢者をはじめとするあらゆる世代や分野に対してもエネルギーを注ぐことになると思っている。

(2019年7月8日受付)

稲見昌彦 (正会員) drinami@star.rcast.u-tokyo.ac.jp

1999年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士(工学)。電気通信大学教授、慶應義塾大学教授等を経て2016年より東京大学先端科学技術研究センター教授。2017年よりJST ERATO 稲見自在化身体プロジェクト研究総括を兼任。博士課程在学中に『光学迷彩』を開発。本学会誌編集長。

中田真城子 (正会員) pr@mplpl.com

嵯峨美術短期大学、夙川女子大学専攻科卒業。映像製作会社、画廊、出版社を経て独立。2013年mplusplus(株)を設立。取締役兼コーディネータとして現在に至る。本学会誌副編集長。